

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-63C	16-115	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）		
Consumption of alcoholic beverages in adolescence and adulthood and risk of testicular germ cell tumor. 青年期および成人期の飲酒習慣と精巣腫瘍発症リスクの関連		
執筆者		
Biggs ML, Doody DR, Trabert B, Starr JR, Chen C, Schwartz SM.		
掲載誌		
Int J Cancer. 2016 Dec 1;139(11):2405-14. doi: 10.1002/ijc.30368. Epub 2016 Aug 16.		
キーワード		PMID
飲酒、疫学、青年期、成人期、非セミノーマ、セミノーマ、精巣腫瘍		27474852
要 旨		
目的： 精巣腫瘍の病因は解明されていないが、これまでの研究から、生後の環境要因や生活習慣が関連することが示唆されている。しかし、飲酒習慣と精巣腫瘍の発症リスクとの関連については一定の結論が得られていない。そこで本研究では、青年期または成人期の飲酒習慣と精巣腫瘍発症リスクの関連について検討した。		
方法： 米国の一般住民を対象とした症例対照研究を行い、1999～2008年に初めて精巣腫瘍の診断を受けた18～44歳の症例540人と、年齢層が等しく同地域に居住し、精巣腫瘍の既往がない男性1,280人を対照として分析した。対象者に12～13歳期、14～17歳期、精巣腫瘍の診断日（対照においては症例と対応する日）から遡って5年間の3期間でのビール、ワイン、蒸留酒それぞれの摂取量を面談により質問した。上記3期間での飲酒量（全体および各アルコール飲料ごと）と精巣腫瘍発症（セミノーマ、非セミノーマで層別化）との関連について、ロジスティック回帰分析を用いて、オッズ比(OR)、95%信頼区間(CI)を算出した。交絡因子として、年齢、診断日、学歴、喫煙、大麻の使用について調整した。		
結果： 非飲酒者を対照として、診断日までの5年間においては、1週間あたり1～6、7～13、14ドリンク以上の精巣腫瘍発症OR(CI)は各々、1.20(0.85, 1.69)、1.23(0.81, 1.85)、1.56(1.03, 2.37)であった(傾向P=0.04)。同様に14～17歳期においては、1.39(1.06, 1.82)、1.07(0.72, 1.60)、1.53(1.01, 2.31)であった(傾向P=0.05)。12～13歳期では飲酒者が少なく有意な関連は見られなかった。診断日までの5年間では、セミノーマよりも非セミノーマの方が飲酒量との強い傾向が見られたが、飲酒量との関連の強さにおいて、セミノーマと非セミノーマの間に統計的有意差はなかった(P≥0.10)。また、アルコール飲料の種類による関連の違いは見られなかった。		
結論： 青年期および成人期の飲酒量が、精巣腫瘍の発症リスク上昇と関連することが示唆された。		